

自己点検・評価報告書（バイオ・情報メディア研究科）

基準2. 学生
2-2 学修支援

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 教員と職員等の協働をはじめとする学修支援体制の整備					
教職協働による学生への学修支援に関する方針・計画・実施体制を適切に整備・運営しているか。	月に1回開催される研究科運営委員会や専攻で開催される運営連絡会、教務委員会では、大学院生に関する様々な内容を、教員、事務職員の両方が出席して意見交換・議論を行い、決定している。	-----	a : 教員と事務職員が意見交換や議論を行い、教職協働で学修支援を行う仕組みが確立しており、さらに発展させる。	他の大学・大学院での成功事例を収集し、SD、FDの一環として共有することにより、教員と職員が協力して、学修支援にあたる。	-----
障がいのある学生への配慮を行っているか。また、具体的にどのような配慮をしているか。	本学の学部から大学院に進学してくるため、学部生時代と同様のケアを行うとともに、研究室での活動に関しては指導教員が配慮を行う。	-----	-----	-----	-----
オフィスアワー制度を常勤・非常勤を問わず全学的に実施しているか。	すべての授業科目で、常勤、非常勤を問わず、シラバスにオフィスアワーの記入を義務付けている。	(改善計画) 教員室のドアの掲示やデザインを工夫し、より学生が教員を訪問しやすくする。 (改善状況) 新型コロナウイルス対策と重複する形で、教員室のドアは開放することになっており、結果として、学生が訪問しやすい環境となっている。	a : シラバス点検時に、よりオフィスアワーに注意して点検する。 b : オフィスアワーに教員を訪れる学生はそれほど多くない。	シラバスチェックの際に「メールで問い合わせること」といった記載があれば、確保している曜日・時間を具体的に記入するよう科目担当教員に求めることにする。	教員室のドアの掲示やデザインを工夫し、より学生が教員を訪問しやすくする。
中途退学者、休学者及び留年生への対応策等を行っているか。	研究を行うための基礎的能力が足りていない場合には学籍異動につながる可能性が高いため、出願前の面談や入試選抜に力を入れている。	-----	a : 出願前に希望指導教員との面談を行うことで、ミスマッチを防ぐことができている。 b : 研究や就職活動の行き詰まりにより、休学や退学する学生もいるため、こういった学生を生まない仕組みが必要である。	-----	-----

自己点検・評価報告書（バイオ・情報メディア研究科）

基準2. 学生
2-3 キャリア支援

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備					
インターンシップなどを含め、キャリア教育のための支援体制を整備しているか。	選択必修科目として社会参加プログラムという科目を作り、インターンシップ、ボランティア活動などを奨励している。	(改善計画) 指導教員からのアドバイスやキャリアサポートセンターの活用による指導体制を更に強化する。 (改善状況) 指導教員とキャリアサポートセンターとが一体となり、未内定学生の確認と個別指導の体制を強化している。	b : 日本で就職を希望する留学生の就職率が芳しくない。	----	指導教員からのアドバイスやキャリアサポートセンターの活用による指導体制を更に強化する。
就職・進学などに対する相談・助言体制を整備し、適切に運営しているか。	大学院生の就職は指導教員が責任をもって指導するとともに、キャリアサポートセンターおよび就職担当教員に相談しやすい状況を作っている。	----	----	----	----
他大学のキャリア支援に関する取り組みなどを収集・分析し、キャリア支援体制の見直しなどに役立っているか。	他大学・大学院の事例を随時モニターしつつ、本学の学生・本学の専攻にあった就職イベントを毎年工夫し開催している。	----	----	----	----

自己点検・評価報告書（バイオ・情報メディア研究科）

基準2. 学生
2-4 学生サービス

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 学生生活の安定のための支援					
学生サービス、厚生補導のための組織を設置し、適切に機能させているか。	学務課において、学生サービスの実態を一元的に把握、厚生補導のための施策を行なっている。また学部の学生委員会において学生委員長を中心に、大学院生も含め日常的な学生への配慮と指導を行っている。	(改善計画) 学生相談室と医務室との連携から「ヘルスサポート・センター」に改組することで、臨床心理士など専門家によるアドバイスも受けられるようにする。 (改善状況) 2021年4月より「ヘルスサポート・センター」を立ち上げ、精神的不調を訴える学生は、このセンターに常駐する専門家によるケアを積極的に受けられるような体制を確立した。	a : 大学院生は、入学当初から指導教員が決まっているため、指導教員が厚生面も含め責任をもって学生を受け持っている。 b : 専門家によるサポート体制の充実	トラブルシューティングに早めに対処するための情報蓄積、分析、活用の具体策を検討する。	学生相談室と医務室との連携から「ヘルスサポート・センター」に改組することで、臨床心理士など専門家によるアドバイスも受けられるようにする。
奨学金など学生に対する経済的な支援を適切に行っているか。	大学院独自の給付型奨学金や経済的支援を必要とする学生に対する授業料減免、私費留学生に対する授業料減免といった制度を設けている。また、ティーチングアシスタント (TA) の1コマ単価を増額 (博士前期) することで大学院生に対する就学支援の意味合いも持たせている。	----	a : 給付型奨学金や授業料減免、ティーチングアシスタント制度を組み合わせることで、国立大学以下の経済的負担に抑えることも可能にしている。	経済的な問題を抱えつつも、成績優秀である学生に対して、より幅広い支援制度について検討していきたい。	----
学生の心身に関する健康相談、心的支援、生活相談などを適切に行っているか。	日常的には指導教員が学生生活における相談の窓口となるほか、学生相談室における相談員が専門的なアドバイスを与え、心的支援を行っている。	----	----	----	----

自己点検・評価報告書（バイオ・情報メディア研究科）

基準2. 学生
2-6 学生の意見・要望への対応

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 学修支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用					
学生への学修支援に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、学修支援の体制改善に反映させているか。	大学院においてもすべての授業科目で授業評価アンケートを実施している。結果は、当該教員のみならず専攻長、研究科長が確認する仕組みを整えている。また、主要な建物に匿名でも投函可能な意見箱(Box for Best Care:BBCと命名)を設置し、学長室が直接開箱することにより、ハラスメントを含めた学修上の訴えを受け付け、必ず回答している。回答は、学生ポータルサイトに掲載している。修士論文に関する発表会では副査教員を設定し、指導教員以外による指導を受ける機会を設けており、指導が研究室に閉じない工夫をしている。	(改善計画) 学修ポートフォリオの何らかの形でのシステム化をおこない、学生自身が自己の学修内容を振り返りができるようにする。 (改善状況) 新型コロナウイルス対策としてオンライン講義が広がり、その過程で学生の提出した課題に対する回答や質問などがファイル化され、学生の学修内容の振り返り材料として利用可能となっている。	a : 2018年度より、授業評価アンケートをベースからWebベースに変更した。 b : 学修ポートフォリオの整備による学生自身による学修振り返りとその内容の教員による把握を進める必要がある。	授業アンケートや在学生調査で取得したデータのIRセンターでの解析をすすめる。	学修ポートフォリオの何らかの形でのシステム化をおこない、学生自身が自己の学修内容を振り返りができるようにする。
② 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用					
学生生活に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、学生生活の改善に反映しているか。	基本的には、学部のケアシステムを大学院にも適応している。特に、大学院では研究室が蝸壺化する懸念があるため、各専攻ごとに複数の教員に接する機会を設けている。	-----	a : 複数教員による指導体制が順次整ってきている。	学生側からも積極的に他教員の意見を聞く風土をさらに醸成していく。	-----
③ 学修環境に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用					
施設・設備に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、施設・設備の改善に反映しているか。	大学院においては、修了生に対して毎年アンケートを実施し、研究科長、専攻長が内容を確認している。	-----	a : 大学院に対する満足度は高い。	上述の目安箱にも、大学院に関する意見が入ることが少ない。	-----

自己点検・評価報告書（バイオ・情報メディア研究科）

基準3. 教育課程
3-1 単位認定、卒業認定、修了認定

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 a：効果が上がった点 b：改善が必要な点	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの策定と周知					
①-1教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーを定め、周知しているか。					
各学部、研究科が定める教育研究上の目的を達成するための適切なディプロマ・ポリシーを定めているか。	大学の基本理念のもと、大学院全体で定める共通のディプロマポリシーを定めている。さらに、大学院共通のディプロマポリシーに専門的能力を具体化した形で、専攻ごとにディプロマポリシーを定めている。	----	a： 育成人材像が大学院全体として明確化され、単位認定等に明確な方向性が得られるようになった。	----	----
ディプロマ・ポリシーをどのように公開しているか。また、その方法は適切か。	大学院のウェブサイト、大学院案内、大学院学生便覧において公開しており、適切な公開方法である。	----	----	----	----
② ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の策定と周知					
ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等を適切に定め、周知しているか。	博士前期（修士）課程、博士後期課程では、ディプロマポリシーを定めており、特に修士論文審査や博士論文審査の場において、当該ディプロマポリシーに沿った審査が行われている。修了要件について、大学院学生便覧に記載し、学生および教員に配布している。	（改善計画）特に博士前期（修士）課程において、研究科総代を1名選出する際に、全員が納得する選考基準を模索していく必要がある。 （改善状況）各専攻での学生の業績を、例えば、学会発表、論文発表など項目別に点数化することで定量化し、比較しやすい基準を模索した。	a： 修士課程では在学中最低1度は学会等で発表することを求めるなど、研究の外部通用性を意識した運用も行われている。	----	特に博士前期（修士）課程において、研究科総代を1名選出する際に、全員が納得する選考基準を模索していく必要がある。
単位認定基準、進級基準、卒業・修了基準を定めて、これを厳正に運用しているか。	各科目の単位認定にあたっては、シラバスに単位認定基準(成績評価基準)を明示し、各教員がシラバスに従った評価を行っている。シラバスが学生と教員との契約であるとの意識を、研究科委員会等で教員へたびたび周知している。修了判定においては研究科委員会において、それぞれ根拠資料を回覧し、厳正に運用している。	----	a： 修士論文審査会、博士論文審査会は、各専攻とも指導教員が主査となるが、必ず副査を立てて審査を行っている。また各審査会は公開発表会で行い、透明性も確保している。	教職員が高い意識をもち、連携するための情報の共有と研修の充実を行う。	----
単位認定基準、卒業・修了基準を定めて、教育課程の編成・実施に反映させているか。	現状の教育上の問題点を研究科委員会や各学部で行われるアゴラの場でも確認することにより、現状カリキュラムの問題点を認識し、改善取り組んでいる。学術や社会の変化に対応するため、カリキュラムの継続的見直しを行っており、その見直しの全体的な調整を研究科委員会でおこなっている。	（改善計画）ラーニングアウトカムズのとくにコンピテンシーの定量化をすすめるとともに、コンピテンシーの育成により配慮したカリキュラム設計をすすめる。 （改善状況）ジェネリックスキル科目として「サイエンスプレゼンテーション英語」を開講した。この講義は、スキルとしての英語能力だけでなく、論理的思考をいかに効率的に聞き手に伝えるかというコンピテンシー向上に寄与する講義である。	b： 各分野の専門力育成のための授業は提供されているが、コンピテンシーの育成が十分にされているのか評価がされていない。	----	ラーニングアウトカムズのとくにコンピテンシーの定量化をすすめるとともに、コンピテンシーの育成により配慮したカリキュラム設計をすすめる。
単位認定など成績評価の公平性のためにどのような工夫をしているか。また、GPAなどをどのように活用しているか。	大学院の科目は総じて履修者が少数であり、科目による人数のばらつきもあるため、成績分布は作成していない。学部同様にGPAを算出し、成績表掲載することで学生に周知している。	（改善計画）ルーブリックを用いた成績評価の実施 （改善状況）成績評価方法を、シラバスやmoodleで明確化し、その基準に従った成績評価を行った。	b： 大学院評価基準の統一を一層進める必要がある。とくに研究の評価の統一・厳格化が望まれる。	----	ルーブリックを用いた成績評価の実施

自己点検・評価報告書（バイオ・情報メディア研究科）

基準3. 教育課程
3-2 教育課程及び教授方法

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① カリキュラム・ポリシーの策定と周知					
各学部、研究科が定める教育研究上の目的を達成するための適切なカリキュラム・ポリシーを定めているか。	大学の基本理念のもと、大学院全体で定める共通のカリキュラムポリシーを定めている。さらに、大学院共通のカリキュラムポリシーに専門分野を具体化した形で、専攻ごとにカリキュラムポリシーを定めている。	(改善計画) 学修成果のモニタリングをもとに、カリキュラムポリシーが不変でよいかを不断に点検し、必要があれば見直していくことを検討する。 (改善状況) 学生の講義アンケートでの意見などを参考にして、個別の大学院講義の見直しを行うとともに、カリキュラム全般についても見直した。	b : カリキュラムポリシーの設定はおこなったが、教育の現状をもとに、その継続的な見直しを議論していく。	-----	学修成果のモニタリングをもとに、カリキュラムポリシーが不変でよいかを不断に点検し、必要があれば見直していくことを検討する。
カリキュラム・ポリシーをどのように公開しているか。また、その方法は適切か。	大学院のウェブサイト、大学院案内、大学院学生便覧において公開しており、適切な公開方法である。	-----	-----	-----	-----
② カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの一貫性					
カリキュラム・ポリシーとはディプロマ・ポリシーとの一貫性が確保されているか。	カリキュラムポリシーでは、大学院を含む全学共通の6つのラーニングアウトカムズを育成するプログラムを定めており、このうち、専門力の部分に各学部・各専攻の特色があらわれている。ディプロマポリシーにおいても、6つのラーニングアウトカムズの達成を規定しており、両ポリシーは整合している。	-----	-----	-----	-----
③ カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系的編成					
カリキュラム・ポリシーに即した体系的な教育課程を編成し、実施しているか。	大学院カリキュラムポリシーの即した形で、専門的な知識を身につける専門科目、研究を遂行する研究プロジェクト科目、技術者としての汎用的な能力を身につけるジェネリックスキル科目という科目群を設定している。	-----	a : 学生が所属する専攻に関わらず、幅広い分野の授業が用意されている。また、国際化を意識し、留学生を主対象とする英語でのみの授業も用意されている。	-----	-----
シラバスを適切に整備しているか。また、作成にあたって第三者による検証を実施しているか。	シラバスは、全学で共通のものを教務システムから教員が記入する。シラバスが学生との契約である意識を徹底し、評価方法の具体的な記載、ラーニングアウトカムズとの対応などまで含めて、記載内容を明確に教員に徹底している。書かれたシラバスは、各専攻の専攻長が中心となり、記入者以外の教員がチェックするとともに事務職員も内容を確認し、必要に応じて科目担当教員に修正をさせている。	-----	a : 専攻長を中心としたチェック体制を作ったことで、学生にとってわかりやすいシラバスを作成できている。	例えば、予習復習のめどとなる時間の明記など今度もシラバス記載内容を見直していく。	-----
⑤ 教授方法の工夫・開発と効果的な実施					
アクティブ・ラーニングなど、学生の主体的な学びを促す授業内容・方法に工夫をしているか。	アクティブラーニング、反転授業、グループ学修、プロジェクトベースラーニング(PBL)について、全教員が参加する全学教職員会で学び、実践している。	(改善計画) 反転授業などを支える大容量データを配信できるIT環境を整備し、反転授業の撮影など教材準備を行う部署を設置する。 (改善状況) 先進教育支援センターが中心になり、環境整備を検討している。	a : 履修者が少人数であることを活かし、アクティブラーニングや議論を取り入れた授業を展開している。 b : 反転授業などを支えるインフラが動画配信など大容量配信には十分ではない。	履修者が少人数であることを活かした授業のさらなる展開。	反転授業などを支える大容量データを配信できるIT環境を整備し、反転授業の撮影など教材準備を行う部署を設置する。
教授方法の改善を進めるために組織体制を整備し、運用しているか。	本学大学院の教員はすべて各学部にも所属しているため、教育力強化委員会で行われる教員による授業評価の実施および結果の報告、教員研修などは、大学院の授業科目においても活かされている。	(改善計画) 大学院科目についても教員による授業点検を実施する必要があるか検討する。 (改善状況) 大学院講義は、学部と比較してその専門性が高いため、各教員が工夫しながら独自の方法で講義している場合が少なくない。したがって、一律の決まった方法での授業点検を行うより、例えば、授業アンケートなどで学生の意見を確認しながら、そのフィードバックという形で対応するのが現実的と考えている。	a : 教育力強化委員会を学長直属で設置し、学長室が事務補佐をしている。 b : 大学院の科目については、学生による授業評価アンケートは行っているが、教員による授業点検は実施していない。	教授方法、教育改善などに精通した事務職員の継続的育成と教育方法を専門とする教員の採用をおこない、教員に対する教育支援組織を整備する。	大学院科目についても教員による授業点検を実施する必要があるか検討する。

自己点検・評価報告書（バイオ・情報メディア研究科）

基準3. 教育課程
3-3 学修成果の点検・評価

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用					
学生の学修状況・資格取得状況・就職状況の調査、学生の意識調査、卒業時の満足度調査、就職先の企業アンケートなどにより学修成果を点検・評価しているか。	学生の単位取得状況、進級率、修了率については、事務局学務課においてデータをまとめている。就職率、就職先については事務局キャリアサポートセンターおよび研究科委員会で評価している。大学院においては、修士論文提出時に修了生調査を実施している。	(改善計画) 大学院として適切な学修成果の可視化方法について検討する。コンピテンシーの客観試験による評価、指導教員によるコンピテンシー評価などを実施する。また、学生の就職状況の質を評価する方法を検討していく。 (改善状況) 学修成果の可視化方法としては、ラーニングアウトカムズに基づく各項目についての目標を講義開始前に設定し、講義終了後、その目標に対しての達成度を評価する試みを行った。	a : 進級率、修了率、就職率などの指標をまとめている。	進級率、修了率、就職率、修了生調査などの結果が、キャリアサポートセンター、学務課に分散しており、IRセンターでの一元管理、解析が望まれる。	大学院として適切な学修成果の可視化方法について検討する。コンピテンシーの客観試験による評価、指導教員によるコンピテンシー評価などを実施する。また、学生の就職状況の質を評価する方法を検討していく。
② 教育内容・方法及び学修指導等の改善へ向けての学修成果の点検・評価結果のフィードバック					
学修成果の点検・評価の結果を教育内容・方法及び学修指導の改善にフィードバックしているか。	大学院では、半期ごとに研究に関する科目を履修するため、学生の研究進捗状況が適宜把握できる仕組みとなっている。また中間審査会などに多くの教員が参加することで、専攻内で学生の持つ知識技能などを共有することで、教育内容・方法の改善に役立っている。	(改善計画) ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法の確立に合わせて、カリキュラム改善を科学的に検討する各学部の体制の整備とそれを支援する全学的な組織の整備が必要である。 (改善状況) 各専攻で大学院教務委員会を組織して、学修成果の可視化方法に関して議論を行い、カリキュラム改善を前向きに検討した。	a : 研究指導を通じた学生の学修状況の把握 b : カリキュラム改善がより客観的な指標に基づいて行われることが望まれる。	時代の変化に応じたカリキュラムを設計するとともに、技術者として必要とされる普遍的な能力を定義しその能力を開発するカリキュラムを設計する。	ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法の確立に合わせて、カリキュラム改善を科学的に検討する各学部の体制の整備とそれを支援する全学的な組織の整備が必要である。